

三月も半ばを迎え、日増しに昼が長くなることを実感します。春のお彼岸を迎える季節となりました。

お彼岸には、家族や親類縁者でお墓参りに行き、お花やお線香などを供えて手を合わせ、亡き大切な人の在りし日の姿を偲びます。お墓参りの供養によって、亡き方やご先祖様に思いを寄せ、自分と亡き方々との繋がりを感ずることが出来ます。

自分の存在に、両親をはじめご先祖様は欠かせない存在です。そして、その方々の周りには顔も名前も知らないたくさんの人々が居て関わり合い、さまざまな縁をつむいでいたのです。その無数の縁が、今、この自分を存在させてくれているのです。それは、今を共に生きる家族や親戚も同じでしょう。

自分の存在は、血縁で繋がっている方々のみならず、さまざまな関わりの中で繋がっているたくさんの、数え切れないほどの縁が重なり合ったものであり、それは今現在も、これからもそうであるということに気づかされます。

お釈迦さまは、全ての形造られているものはたくさんのさまざまな縁が関わり合い重なり合って生み出されたものであるとお説きになり、お経の中でそれは「衆縁和合」と表現されました。

お墓参りのご供養は、自分自身の存在がまさに「衆縁和合」の存在であるということを感じ

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

かせてくれる尊い行いであると受け止めることもできるでしょう。

自分自身がさまざまな縁が重なり合った存在であるということは、裏を返せば自分もまた誰かの縁になるということでもあります。

ご供養によって亡き方々との繋がりを感じ、自分自身はたくさんの人々の縁が「衆縁和合^{しゆえんわごう}」した存在であることを知り、更に自分の生き方が誰かの縁となることに気づくとき、自分自身の生き方そのものを見つめてお釈迦さまの教えに照らし、問い直すことができるのではないのでしょうか。

そういった生き方が、仏教が理想とする安らぎの世界である「彼岸」なのかも知れません。

— 終 —